



# 白衣のポケット

宇品・翠・霞日記

文・松浦 雄一郎  
(医学部附属病院長)

## 生きざま死にざまの模 索から生まれたのが、 随想集「白衣の中味」

私にとって、書物はガソリンとしての専門書及び日常的な読みを和らげる潤滑油、あるいはおやつのようなものに分けられると思っ

ている。私は、その証として「白衣の中味」なる随想集を諸家の御批判を仰ぐべく発刊した。それは住み慣れた広島大学医学部を辞して県立広島病院に就職し、前線医療を担当して十年目のことであった。

それに達するまでに、多くの医家や各分野の評論家が書かれた医学専門書以外の医学絡みの医学概論、医学評論、医学随想からメロドラマまでを、医家としての自分の生きざま、死にざまを求めて手当り次第漁った。それらの本は自分にとっては潤滑油であり、おやつのようなものである。その一部は貸し出ししたりして失ったものもあるが、それら一冊一冊は、私にとっ

ては宝物である。多くのものは私の書齋の一角を占め、本棚を飾るだけではなく、それらの中身は私の体の中に脈々と生々しく生き続けている。昭和六十年、「白衣の中味」を発刊したのは、そのようなことに根ざしているわけだ。

## 人並みの人間で

### ある証として

私も医学界では、一度大学を辞して前線の病院に出て、一定期間経って再び大学の医師になることを「大学に帰る」という。十三年間お世話になった県立広島病院から私も大学に帰ったが、あつという間に十年が過ぎつつある。

時代が変わり、環境が変わり、立場が変わり、そのほか諸々の多くのものが変わったので、私自身も大きく変わったのでは、と以前の「医師である前に人並みの人間でありたい、あるべき」との大言豪語は線香花火ではなかったかと自問し、今度は「医師である前に人並みの人間でありたい」と

いう言葉を、「大学人である前に人並みの人間でありたい」と追加宣言し、これまでの基本態度を頑なに守り続けていきたいと思っ

ている。そこで、ここに再び「大学人である前に人並みの人間でありたい」という生きざまの証として「白衣のポケット・宇品・翠・霞日記」を発刊することにした。

## 感性を大切にしたい

### 生きかたを求めて

内容は、「I 医の原点」「現場からの報告」、「II 医療の周辺」、「III もう一人のマリアー海外医療見聞録」、「IV 対談」宮田親平から興一、宮田親平」からなっている。

宇品は県立広島病院を指し、翠はわが家を指し、霞は広島大学医学部を指している。それら三つを拠点とした生活の中で、感じたことを飾ることなく筆の向くままに書いてみた。どんな生活の中にも感性を大切にしたいということを強調したつもりである。

どなたかこれを手にした方が、ご自身の生きざま、死にざまの中に遊び心を多少なりとも抱いていたければ、筆者の望外の喜びである。

(A5判 二二八六頁)

一五〇〇円

榊かまくら春秋社

一九九六年十一月刊

## プロフィール

(まつうら・ゆういちろう)

◆一九三六年広島県呉市生まれ

◆広島大学医学部卒業の後、米国南カリフォルニア州立医科大学胸部外科留学。県立広島病院第二外科副部長、第三外科部長を経て、広島大学医学部第一外科教授。現在広島大学医学部附属病院長

